

シシリ島での優雅なるバカンス

平 山 房 子

ラグーサの街にて

ラグーサは丘陵に囲まれた旧市とその一方の斜面に沿って旧市街を見下す様に発展していった新市とから出来ている。イタリアにおけるアスファルト鉱業の中心地として活気のある都市である。しかし同じシシリ島の都市でも、カタニーヤのごみごみしさとは正反対にしっかりと落ち着いた古都のたたずまいをとどめた街である。先史時代の墓地が残っているという集落起源の古さは、岩をくりぬいて作られた住居や、舗装された敷石の一枚一枚の上に残されている先人達の足跡のくぼみがそれを物語っている。とりわけ、新市街から望む旧市街とその周囲の荒々しくも寂莫とした砂漠の中に建つ石の町とい

った風景は印象的であった。

我々は新市内にあるフランクの家に着いた。やもめ暮しの家では不便ではないかと彼はいろいろ気を遣っている様だったがこちらとしていむしろ好都合で、我が家同様に気尽に振舞える事の方が有難かった。家中、本と印刷物で埋まった石造りの家であった。そしてここがアナキズム文庫／フィアコラ／の本拠である。すべては質素ではあったが、彼の生活態度は優雅でさえあった。腰かけの部分だけ籐で出来た木製の椅子は、穴のあいた籐は取り除かれ、その代りにより合せた荷造り用の紐で見事に編み上げてあった。フランクの手作りの作品である。コーヒーにビスケット程度の軽食をとる時でも彼は

あわてなかった。散らばったノートの切れ端や鉛筆を片寄せた狭い机の上に白いテブルクロスをおもむろに掛け、「さあ、食卓が出来た」と我々を促がした。雑然と積み上げられたとしか見えない書物の山も、彼なりに定まった場所に置かれていくらしく目的の本を取り出すのにあまり苦労はしなかった。「ちっほけな私の家の扉はいつも君達のために開かれている」と彼が私への手紙に書いた言葉通りに、二階は我々が占領してしまった。そして階下では、たとえこの家の主人が外出中でも、子供迄の広い層の同志や友人達が絶えず出入していた。家族的な親密関係でそれは結ばれている様であった。だから我々は自分の方から出かけて行かなくても、二階迄聞こえて来る話声をきいては階段を降るだけで多くの人々に会う事が出来た。そして誰もが如何にして我々を歓待しようかと心を砕いている様に見られるのだった。

「ここでもアナキストは気狂いの様に人々から思われている」とフランクは苦笑まじりで私に話したが、どうして彼の人気は大したものだ。外出すると人々が親しげにフランクに近づいて来てはあいさつする。「チャオ」位ですめば助かるのだから大抵は車の烈しく行き交う中で立話はずむ。そんな時、我々はその近辺で用事を片づける事を考える。郵便局でもあれば幸いだ。日本宛の航空便も出せる。ところが郵便局によって料金がみな違う。そしてどの窓口の局員も自分の料金が正しいと頭から信じている。フランクにうったえたと「それはおかしい」と彼は首をひねる。がたいして気にする様子もない。仕方がないから云われるままの切手をはって投函する。そして我々のラグーサからの料金の異なる絵ガキはすべて無事に日本にとどけられていたのである。どれが正しい料金か我々には分らずじまいである。

シシリ島と云えば、貧困と因襲、そしてマフィアのイメージが私を支配していた。マフィアというのはフランクに云わせると、全くのならず者の集団でうじ虫的存在であるという。そして彼らはシシリ島でも主として北部地方にその組織があり南部のラグーサでは存在しないと云った。貧困と因襲は今も全島を覆っている様で、ここでも黒っぽい身なりの奥に苦悩のしわのきざみこま

その年、一九七三年と云えば、日本は世界的にその高度成長を誇っていた。折しもラグーサでは八燃えよドラゴンVのブルース・リー等の唐手映画が次々と登場し、この街の人々の東洋熱をあおっていた。我々を見て近よってくる子供達は「カラテ、カラテ」と云ってその格好を真似て見せ「カワサキ、ホンダ」を連発して日本資本主義の威力を我々に見せつけた。しかし日本人観光団はこの街まではおしにかけていなかった。中心街に並ぶホテルの客はほとんどがアメリカ人、ドイツ人であるとフランコは云った。ヨーロッパに至るところで出会った日本人の顔もここでは一人も見かけなかった。すっかり観光客ぞろいした本土の人間と違って日本人を見るのが始めてという人々が多かった。そのラグーサにやってきた我々はさしずめ一寸したスターなみであった。街を散歩すれば、すれ違う人々の間から「ジャボネーゼ」と云う無遠慮な声が聞えて好奇と親愛の入り交った表情の大人達が我々の後姿を見送り、大通りの両舗道のカフェ・テラスで憩う人々の眼は一斉に我々に注がれる。すっかり喜んだのは我々について歩いている若い同志達だった。「これはすごい、まさに素晴らしいマニフェスタシオンだ」肩迄垂らした黒いちぢれ毛の頭を振り振りジュゼッペは悦に入って我々を引き廻す。ビッポという愛称でみんな

に親しまれている彼はラグーサの若い同志達のリーダー格で十九才の青年である。フランコの家から遠くないところに事務所を借りて、若い仲間達と協力して子供達のための無料学習会を開いては活発に運動をすすめている闘士である。イタリアでは子供達の立働く姿が目立つ、ラグーサでも同じである。店番やカフェのギャルソン等に可愛らしい子供がいる。彼等は大人達と同じ様に働いている事を苦にしない、愛想もよい、フランコや若い同志達はそんな子供達の仲間である。我々の姿を見ると彼等の方から嬉しそうに近づいて来る。フランコの方も心得ていてチップをはずむだけでなく、仕事の内容や家族の消息等こまごまとたずねてやる、そして最後に彼等を励ます言葉も忘れない。

物価の値上りムードはここも同じだ。ビッポは近く「諸物価値上げ反対デモ」をラグーサで組織すると話した。目下、デモ用のステッカー作りに忙しい。彼独得の印刷法である。材料は今日、どこにでもあるバックキングの時に使用されている白い発泡スチロール板である。板といっても木ではないから彫るのが容易である。文字を彫り込むとそれにインクをつけて広げた紙の上に押つける。最初の頃は彫り誤って、さかさまの字が時々混ったりしたが今はもう熟練工で失敗はない。事務所の壁はそんな

ピラで覆われている。その中の一枚をもらってきたのがイオム7号の表紙を飾ったのである。

ジーノ、アンジェロ、ジョルジュ等ここには十人ばかりの若い同志がいる。そしてデモの動員数は千名ぐらいになるという。

旧市街見学。同志からの招待の昼食会と忙しく過した二日目の午後である。「明日からラグーサ海岸にキャンブに行こう」とフランコが云った。「海でゆっくり過そう。そこから帰ったら次は田舎へ一週間程行こう、ラグーサの海と山はいいぞ」と人なつこい笑顔でいう。我々は驚いた。一週間後、その時我々はもうバリーにいる筈だ。綿密なプランに沿って行動する旅はもとより好きでなかった。しかし世界中から旅行者が殺到するヨーロッパの夏のシーズンでは、少くともホテルだけは獲得しておく必要があった。イタリア旅行のあと、バリーに滞在する一

ヶ月のために私が見つけた十四区の安ホテルの管理人はホテル到着日の予定時間が少しでも過ぎたら予約は取消すというのでその日の前金まで払って手に入れた部屋であった。フランコとの呑気なイタリア縦断旅行をその時点で予想出来なかった私としては、充分すぎる位の日数をシシリイのために見積った気であった。こんな事ならホテルの予約日をもっと先にしておくのだったと悔んでも

始まらない。かと云って同じ様な条件のホテルを見つけることは容易ではないだろう。今迄幾度も話した同じ事を又クドクドとフランコに説明した。甚だ不満そうではあったが彼は納得した。それでも海へは行くといひ張る。勿論、それは我々を喜ばそうと計画したことには違いないが、我々の側から見ると全く彼自身が楽しんでる様に思える。私としては、正直な気持、真夏の海岸で焦がされるより、この近辺に散在しているときいたギリシャ植民遺跡などを訪ずねてみたいものだと考えていた。しかし、子供の様にはしゃぎながら真新しいテントやマツトを運びこんで来るフランコを見るとそれも云い出しかねるのだった。

ラグーサの海と空

翌日は早朝から身支度を整えて我々はひたすら迎えの車の到着をまっていた。その間に坂を上りつめたところに店を開いている雑貨屋へ行く。二、三日前にアメリカ旅行から帰ったばかりだというその主人は、我々を海へ連れて行く事をフランコに進言した張本人で、私に商品の水着をプレゼントするという。ビキニはいやだと主張した私のために背中を大きくあけたスタイルの水着が

数着用意されてあった。色や柄よりもまず軀に合う小さいサイズを選ぶ事を私は心得ていたから時間はかからなかった。フランコは海岸での肌の手入れをするオリブオイルやクリームにサボンの類を一抱えもマダムに注文している。何年来、海水浴に出かけたことのない私は海辺のお洒落に精通している彼にすっかり驚かされ、人は見かけによらぬものと妙なところで感心したものだ。それは海岸に着いてからも証明された。私の様にワンピーススタイルの水着の女性は殆んど見かけなかった。誰もかれもビキニ姿でのびのびと海岸を闊歩している。それを見たときフランコの勧めを頑なに拒んでビキニを着なかった自分を全く後悔した。決してそれは流行云々、スタイル云々、といった根拠からではなく、実にビキニ姿こそがシリリーの焼けつく太陽の下で最も美しく、自然で、ふさわしいものであったからだ。その後悔は今でも消える事がない。だがそれは後のことで、雑貨屋から帰っても迎えの車の姿はない。フランコは少しも気にせず、「キャンプに行く」といふ物が喰えないから、今のうちに充分たておこう。その中に車もくるだろう」と我々をレストランに導くのだった。車が家の前に止ったのは、夕方六時頃であった。徒らに一日をフイにした様に残念がるのは我々だけである。車の主とは見れば昨日の旧市

街見物にもその車を提供してくれたむかしの家の住人である。手広く事業を営んでいて、車を待つ間に我々が食事をとったレストランも彼の経営だという。フランコのよき仲間の一人である。ともあれ、双方笑顔であいさつを交すと何事もなく出発である。彼等にとってすべてはノルマルに動いているのである。

マリナー・ラグーサ（ラグーサ海岸）はラグーサの街から南へおよそ三五キロのところに広がる遠浅の美しい地中海の海岸である。シーズンで海水浴客のあつまる浜辺の町を避けて、我々は更に車を東方へ三キロばかり走らせた地点にキャンプを張った。作業が終ると車は我々とフランコだけを残して帰っていった。そこからは彎曲に沿って横に伸びる海岸線のはるか右手に小さくマリナー・ラグーサの街影が望まれた。時折、水着姿の男女が通りすぎていく以外殆んど一日中人気のない静かな浜辺であった。そこで我々はフランコ式とでも云いたい型やぶりのななななななを送ったのである。何しろキャンプといっても二張りのテントとマット、毛布の類にろうそくにマッチ、他は一瓶の水があるだけである。海に入り砂浜でたわむれ、空腹がおそってくる三キロ離れた海岸の町、マリナー・ラグーサまで食料品の買出しに出かけるのだ。海のむこうはアフリカだ。海岸づたいに往復

六キロの炎天下の道のりは、正に△熱砂の買出し△である。我々のキャンプには昼間はヒッチハイクでラグーサからやってくるビッポやジーナ達にぎやかだった。彼等も加えて交代で買出しに行く。私の連れはマリナー・ラグーサの食料品店の可愛らしいお嬢さんとすっかり仲よしになり、同行したジーノ達から「Tのマリーナ・ラグーサの恋人」とあおられ、△熱砂の買出し△が△熱砂の恋△に発展すると思いきや惜しまらくはその時点では相手のお嬢さんが若すぎたらしい。推定十才？

私はその買出しから免れる事だけを考えた。私の旅はまだ先が長い。多くの初対面の友人達と出会うことになるだろう。真黒な顔になりたくはなかった。「フサギーノ」（フランコが私につけた愛称）とフランコの声がするや否や忽ちテントに潜り込み「目下昼寝中」と大声で答えて出て行かない事にしていた。しかしさすがに暑い盛りには長くはテントにいらなかった。木蔭にマットを移して、横になると気温は四十数度あるというのに、吹きぬける風は意外に冷しく肌に心地よかった。食事も終り昼寝からも目覚めると、今度はコーヒーを飲みに行こうとフランコが云う。マリナー・ラグーサ迄は一寸遠すぎるが、反対の方向に少し行くとたしかカフェが一軒あった筈だといって我々の先に立つ。背の高い葦の群の

中をかきわけ乍ら広い国道に出る。しかし、いくら歩いてもそれらしい建物は見つからず我々はキャンプに引き返した。フランコはあくまであきらめず、一人でコーヒー探しに余念がなかったが、遂にその執念を遂げて目的のカフェを見つけて来た。我々もビッポやジーノ達とあの店に出かけたが、往復するだけでたつぷり一時間半はかかる道のりであった。一杯の熱いコーヒーを飲むために我々はその道を行進した。どこ迄も続いている波うちきわを長い一列になつての帰り道、大きな太陽があたり一面をオレンジ色に染めながら、ゆっくりと水平線のかたに没し去ろうとしていた。

昼夜の区別と腹時計だけが、我々を支配した四日間がすぎた。時がゆるやかに動き、自分自身があたかも天地の調和の中に溶け込んだかの様な充足と解放感の中に浸っていた私であったが、ラグーサに帰る当日ともなるともう朝から落着かなくなっていた。フランコは例によつて少しもあわてず帰り支度を急ごうと浮足立つ我々を制止するとどこかへ消えていった。後で判った事であるが、その日は日曜日で珍らしくこの静かな浜にも海水浴客の姿があった。フランコはその人達の中から、帰りの車を確保しようと思ひ交差に歩いたのだ。一組の男女と話がついて戻って来たフランコからその夫婦者らしい二人を紹介

されたとき、事情をきかされていなかった我々は、てっきりフランコと親しい友人なのだと思っていた。その二人はフランコとは初対面であったが、我々をラグーサ迄運ぶため、車で二往復する商談がフランコとの間でまともだったという訳である。だから若い二人が終日、海水浴を楽しんだ後で我々を迎えに来たのだから、それはもう夕方であった。フランコの遣り方には慣らされたつもりでいたが、又、又、丸一日を棒に振った思いがないでもなかった。フランコ達を残して、先ず、私とTとビッポの三人が出発した。車が走り出しておどろいた。日本では間違いなくスクラップになっている代物だ。ドアには窓ガラスもないし、乱暴な運転でドンドン飛ばすのだから速度メータがこわれていて針は0を指したままだ。ゾーッとする。おまけに五分も走ったかと思うと雲行きが怪しかった空から雨粒が落ち始め、すさまじい夕立となった。ガラスのない窓からは忽ち滝のようになって雨が降り込んで来る。とっさにキャンブ用のマットを取り出してそれを必死に窓に押しつける。垂れこめた闇を強い雨足に前方をさえぎられてもハンドルを握った若者は益々スピードをあげる。こんな調子では、ラグーサ迄命があるだろうかと正直私は心細かった。そんな気持ちも知らず助手席にいる細君の方は、日本人の私に興味を示して旅

の話のいろいろなききたがる。小柄な半身を私の方へむけるとその顔には善意の表われた笑いが一杯であった。幸い、ラグーサの街並が見えた頃には雨足も軽くなり、私の懸念もよそに車は無事にフランコの家にとどついた。若者は我々を降ろすと再びフランコ達が待っているマリナー・ラグーサへと車を駆っていった。

ローマへの道

ラグーサ海岸でのバカンスは終わった。出発に具えて我々は忙しくなった。予定していたアンコーナ、リミニのグループを訪ねる事は日程が許さないこともあったが、バカンスの時期で誰とも会えないというフランコの言葉であきらめた。帰途ローマに寄りイタリア・アナキスト連盟のハウマニタ・ノーヴァを訪問する事にする。彼等と接触のない我々のためにフランコが紹介状を書いてくれた。フランコの口述をビッポが書きサインを済ませる。フランコは一寸ためらったがビッポに促されてサインをする。フランコはハウマニタ・ノーヴァに対しては批判的で、したがって日頃あまり仲がよくないからだ。しかし、イタリアでは互いに相手を批判し合っている、
「いざ」という時には、争いを捨て、仲間うちとして行

動する。我々の大いに見習うべき点である。

出発の日には朝からなんとなく皆冴えない。ラグーサでの最後の食事をとフランコが前日から予約しておいてくれたレストランでの御馳走も胸がつまって進まない。フランコもあまり話さなくなった。ラグーサの小さな駅には若い同志達が顔をそろえて我々を待ちかまえていた。気を紛らそうとして私は彼らの方へカメラをかまえた。単線のレールの上を滑り込んできたローマ行き急行列車には、申し訳の様な一等室が二つくっついていていただけだった。帰りは我々だけの長い道中になるから一等のユーレイルバスを活用することにした。二、三分の停車時間を我々は限らない別離の悲しみに耐えなければならなかった。見送る者、見送られる者、双方に言葉はなかった。こみ上げる感動の涙を私は押える事が出来なかった。フランコは窓の下から私を見上げて励ました。

「フサコ、泣いてはいけない、強くならなくてはいけません」

笑おうとする彼の顔がゆがんでいた。目が泣いていた。列車が動き出した時、「そうだ、これではいけないのだ。この別離をしっかりと自分のものにしないで私は一生悔いを残すだろう」と思った。勇気を起して窓から身をのり出した。若い同志達に取囲まれたフランコの悲しく気遣わしげな、そして愛をこめた瞳が私の視線にからん

だ。「さようなら」私は大きく手をあげた、「ありがとう」あとは言葉にならなかった。汽車はブラットをはなれ、午さがりの強い日ざしの中で、大きく手を振りつけているフランコ達の姿は、やがて一団の黒い影となって遠ざかっていった。「ありがとフランコ、ほんとうに来てよかったわ」動揺をつづける心の中で私はつぶやいていた、「さようならフランコ」そして「さようならラグーサ！」。

* * * * *

シシリーに渡った時のひどい交通事情にこりて、帰途は一等に乗ったので、まずは安心と思ったのが間違いだった。一等車などといっても座席が少しゆったりしている以外は二等車と全く変らない。冷房などという気のきいた装置もないから列車の進行方向によって真夏の太陽が容赦なく照りこんでくる。けれどもイタリアを旅するたのしさは格別だ。どこでも人間の対話がある。人々は親切で話し好きだ。旅は道づれの又とないこのめぐり会いを無言ですごすという法はないとばかり陽気に話しかけてくる。ラグーサを出て間もなく子供づれの夫婦が乗って来た。どちらも小学校の教師だという。夫の方は少し頭のはげ上っている中年男だがひっきりなしに話しかけてきて、果てはイタリア語を我々に教授する。

乳呑児を抱えた奥さんの方は、私と視線が会う度にこぼれる様な笑みで私を見返す。ビスケットを分けてくれる。礼をいって受取り窓ぎわの折れたみ式の小さなテーブルのせていたが列車の震動でそれが床にころげおちた。拾って喰べるわけにもいかず「困ったなあ」と思っていたら、それを見た彼女、又、新しいビスケットを出して、これを喰べるとくれる。全く親切だ。その一家はシラクスサについた時、「寝台がとれたからそちらへ移る」といってコンバートメントを出ていった。シラクスサは大都会でここで列車は車輛を連結するためかなりの時を停車した。そしてこの辺りから車内は混み始めた。二等乗客が我々のコンバートメントの空席を見つけると平気で入って来てそこを占領するのだ。検札がやって来て注意されても、「空席があるのだから座るのは当然だ」と云う。では一等の追加料金を払えと迫られると「隣りまで二等で何故ここだけが一等なのか、そんな不合理はない」とうそぶいて断固として支払いを拒否する。周りの者は皆その言いが正しいと思っているらしいから多勢に無勢、車掌の方が長い押問答の末、根負けして退散してしまふ始末、一等切符を持っているのは我々だけだ。しかし車掌に対しては強引な彼等も同席の我々には遠慮深く大人しかった。右の頬から顎にかけて深い傷跡

のある人相のよくない太った中年男がしばらく私の前の席に坐っていた。映画に出てくるギャング役そっくりの風態であまりいい気持がしなかった。彼の子供らしい男の子が二人、コンバートメントに出たり入ったりしてふざけ合う。それを男はたしなめた。「ここは一等のお客が乗っているのだから大人しくしないではいかんよ。あばれるんじゃない、一等車なんだぞ」と云ってきかせている。少年達は素直に頷くのだがそこはまだ子供、すぐ忘れた様にさわぎ出す。男はその都度同じことを云ってきかせるのだった。そして私の持っているハクツクVの時刻表を見て「そんな本はいくらするのか」とたずねる。「十七フランス・フランだ」と答えると、「なんて高い本だろう」といって目を丸くする。私の方は外観からうける印象とまるで似つかない、人なつこくてやさしいその男の人柄にびっくりさせられた。

本土に渡る頃は、夜だった。民謡でおなじみの、そして私のあこがれの街ナポリを通る頃には夜も明け切ってほしいと願っていたのに、そこはまだくらかった。ナポリ湾の船の灯がキラキラとかがやく星のあかりに似て美しかった。

さらばイタリアー

ローマには早朝に着いた。イタリアーの街はどこに行っても日本とよくにて人間が多いが夏のローマは観光客でゴッタ返している。駅前の広場で腰を下していると二人連れの日本女性から声をかけられた。「スペイン広場へ行きたいのだがどっちへ歩けばよいか」という。二年前ローマに来た時、サーラという友人と手をつないでその有名な階段を駆け降りた思い出があるが、道順を聞かれると自信がなかった。しかし地図を参考に教える事が出来た。「セット旅行で来たが、今日一日自由行動なのだ」という。二人とも若く美しかった。きれいなワンピースに身を包み、颯爽と速さかっていた。その時彼女達は映画ハローマの休日Vの主人公オードリー・ヘップバーン扮する王女様に我が身を置きかえていたに違いない。私はと云えばマリナ・ラグーサの塩水に軀を洗ったままである。しかも背中一面ひどい日やけで、そろそろ皮がむけ始めるのかムズムズしてきたところである。汽車で過した一夜の疲労の表われた顔、敗残兵みたいである。どう見てもローマ見物をたのしむ観光客の様相ではなかったらう。ハウマニタ・ノヴァVの事務所は駅から徒歩で十分程の距離にある。しかし午後三時以降でないと扉

は開いていないだろうとフランコから云われていたのでそれ迄の時間をローマ見物にあてることにする。考えてみると我々だけで名所見物するのはこの時が始めてであった。

ローマに来て是非行かねばならないところがあった。ハトレビの泉Vである。後向きになってコインを投げ入れると再びローマを訪ずれる事が出来るといういわれのある噴水である。二年前、私はそこにコインを投げて帰った。私は再びローマを見る事が出来た。三度目のために私はそれを信じなくてはならない。何もローマという都市にそれ程あこがれている訳ではない。ローマに来ることはヨーロッパの土を踏むことに通じるからだ。コインを投げて興じている我々のとなりでイタリアーの少年二人が長い紐をつけた空罐を泉に投げては手元にたぐり寄せる作業をくり返している。泉の底に沈んでいるコインをさらっているのだ。

ひどく暑かった。三時頃我々はテルミニ駅の近くのタウリニ通りにいた。教えられたハウマニタ・ノヴァVの事務所は閉っていた。その中誰かがやって来る事を期待して角のカフェで我々は一時間あまりを過した。相変らず扉は閉ったままである。やっぱりフランコやビッポの懸念があたっていた。きつと皆、バカンスなのだろう。

我々は夜行列車でフィレンツェにむかう事に決める。

連日、友人達との交歓がつづいている。その間の短かい我々だけの自由時間だ。考えれば少々疲れてもいた。この辺りで観光客気分を味わうのも悪くないだろうと思う。その反面、人と語り合わない旅など実に味気ないと思う。

ローマを夜中に出る汽車の時間迄、我々はA・O・A（アナキスト労働者同盟）のエンニオ・マチアスとの再会の時を過ぎた。このローマのアバルトマンで妻のシャルロッテと暮しているエンニオは八十才を越えている。夫婦とも、もうあまり丈夫でない。シャルロッテは私の顔を見るなり一昔前に病死した一人娘のノラの思い出話をししては涙をこぼす。私の方は少々当惑しないでもなかったが一生懸命なぐさめると彼女も少しは気が落着いたらしい、ノラの手編みだという黄色いレースの手袋を持って来て形見分けだといって私にくれた。四十そこそこで死んだノラは、英仏語に堪能な才色兼備、マチアス夫妻にとつて御自慢の秘蔵娘であったのだ。シャルロッテの毎日は娘ノラの思い出の中に生きているのだろう。そう思うと何とも傷ましい思いがするのだった。エンニオの方は私の連れにむかって云う、「フサコに日本のカレンダーを送ってくれと何度もたのんだのに、ちっとも

た男女は、すぐ親しくなつて話がはずんでいた。早口のイタリア語で充分その意味を理解出来なかったが、文学と政治むきの話題であった。初対面とは思えない熱っぽさで意見を交換している。こんな情景はイタリア旅行では珍らしくなかった。居合せている我々に意見を求めたり発言を促がしたりすることもしばしばだった。

フルーのワンピースに大ぶりの玉のイヤリングとネックレス、ブロンズに染めた髪、貫祿と華やかさが入り交つて中年女性の魅力にあふれている。我々に対して無視することなく「イタリアの暑さには日本の方もびっくりされているんじゃないですか」と気さくに笑いかける。その婦人が下車すると、あとに残された男性の新たな話相手は我々だ。中肉中背、ブラウンの髪にきっちりと分目を入れ、端正な美男子である。ジャーナリズム関係の仕事をしているという。「イタリアではどこへ行ったのか」とたずねられ、「南はシシリ島迄行った」というと、「何故シシリなどへ行ったのか、南イタリアには見るべきものは何もない。自分はローマから南へ行ったこともないし、南部の人間は嫌いだ」とはっきりと云った。北部の人間の典型的タイプと見える。そして「ベネツィアをしらない」という我々に仰天して、「ベネツィアを見ないではイタリアを旅行したとは云えない」とわ

送ってくれない」とか「この前ここに来た時、フサコはちっとも喰べなかった」とか他愛もないことである。仕様のない妹か娘の所業をうったえている老人の情があらわれていた。年金生活者の夫婦に金はない、外出するときも殆んど財布の中は空だ、そんな貧乏暮しではあるが彼にはよい友人達がいる。そんな友人の一人で最も身近かに彼の面倒をみているアリオにエンニオは連絡した。

夕方、エンニオと我々はローマの街角でテリヤ種の愛犬を連れたアリオと落合った。誠実でかざり気のない初老の紳士であるが、さすがにローマの男性、「君はこの前会った時より若くなった」と女性の私への外交辞令を忘れない。彼の案内で、ゆつたりとした広い庭に上つた。えたしう酒なカフェで、ローマの夜をくつろいだ。アリオとエンニオが口々に自分の家で一泊して行け、と勧めてくれたが我々は予定通り、その夜ローマを離れた。

フィレンツェで半日遊んだ後、我々は、バリへの道を進む。猛暑がつづいていた。ジェノア経由、ニース行きに乗る。我々のコンバートメントには、他に二組の乗客がいた。一人は縞のカッターシャツに新聞を手にしたただけの軽装姿の男性、そして発車間ぎわに、ポーターに大きな荷物をいくつも持たせて乗り込んできた、中年の女性であった。汽車が動き出すと、窓ぎわにむかいあつ

が事の様に嘆く。彼は下車する間ぎわ、我々の一人一人と握手を交し乍ら、「是非、もう一度イタリアへ戻つて来て、ベネツィアを見ていくことを希んでいる」とくり返し云い乍ら出ていくのだった。我々も程なく汽車を降りた。ジェノアである。そこからトリノにむかい国境を越えてティジョン経由でバリに入るつもりであった。我々の旅は順調に思えた。ジェノアからの汽車は空いていた。我々だけのコンバートメントでのんびりと一時間あまりも過ぎただろうか。アレッサンドリア駅のことである。通路に出ていった私の連れに誰かが声をかけている。検札かなと思っているとそれでもなさそうで、制服姿の駅員が現われて「お前達、どこへいくのか、この汽車はここから先へは行かないからすぐ降りろ」と指示する。

あわてて荷物をまとめている間に、男の合図でプラットフォームを離れたばかりの列車が再び止った。地上に降りてふり返ると成程、その汽車には全く人影はなく、今はゆつくりと構内へ入っていく。これでは空いていた筈だと内心思い乍ら、時刻表では確かにその列車はトリノ迄行っているのにおかしいと我々には大いに不満であるが仕方がない。行先がトリノだとすると男は先に立ってブラットホーム迄案内してくれた。だが我々がその親切に礼をのべても一向立ち去らない。にこにこして「日本のどこか

ら来たのか、東京を知っているか」等、矢つぎばやに問いかける。上役らしく時々若い駅員が指示をあおぎにやって来る。それでもその場を動かさずうさそうに答えるだけで、すぐ我々の方へむき直る。その中、停車中の列車内に事故が起きたらしく、駅員の幾度目かの要請でしぶしぶ男は我々の側から離れていった。こちらもやっと解放されてあたりを見廻すと、汽車を待つてベンチに腰を下しているおばさんと私の目が会った。ここへ坐れと

笑顔で手招きしてくれる。皆、親切だ。だがこの駅は蚊が多くて、少しの間に、足中が、蚊に喰われたあとだらけになってしまった。アレッサンドリア駅での事件を最後に我々はイタリアに別れを告げた。そこを去るにはまだまだ心が残った。だが一まずパリに行こう。そして汽車の中の紳士が願った様にベネツィアに行く為にも我々は又イタリアに来なければならぬと思う。もう真暗になった窓外に目をやり乍ら私はいつまでもその事を考えていた。

ANARKISMO K. LITERATURO

イ オ ム

バック・ナンバー ごあんない

*第7号(74・12/300円)

労働に関する断章③ 労働と職業 日野善太郎
 <聞き書き> わが回想 塩 長五郎
 講演記録・日本無政府共産党 相沢尚夫

*第6号(74・9/250円)

ある疑問のとはくち(中本彌三郎氏のこと) 寺島殊雄
 江西一三とその時代(完結) 向井 孝
 <詩> 風景 山口 英

*第5号(74・5/250円)

ブルードンへの視点 長谷川 進
 ヨーロッパの旅③ 平山房子
 まぼろしの新聞ゼネ・スト 和田 英太郎

*第4号(74・1/150円/残部僅少)

夢は空想に駆けめぐる 河本乾次
 <小品> 都市 海田真生
 (翻訳) 革命者の組織 草浦公英 訳

*第3号(73・11/150円/残部僅少)

西欧アナキスト見聞55日 前田幸長
 書評<労働運動復刻版> 戸田広介
 江西一三とその時代① 向井 孝

第2号・第1号は品切
 以上いずれも郵送料共

イオム雑記

四百メートルのシカチャン

杉 藤 二 郎

ハリベロー(一九七四・二)の戦後アナキズム運動史年表(一九四六―一九四八)を見ると、アナキスト連盟でも、解放青年同盟に協力していたようであるが、これ等の記事は甚だしい。

当時は、全国的に解放部落が立上り、どここの地域においても、講演会やデモが行われ、警察もこれには手を焼いていた。

私も一九四六年末、部落の人達と昵懇に結ばれていた。一例をあげるなら、こんな思い出がある。

たしか、一九四六年の秋だったと思う。
 麻生吉隅炭鉱の運動会が、桂川小学校のグラウンドを借りて行われた時の事である。通称シカチャンの名で通っている、解放部落の中田鹿夫という青年が、四百米競走で一着になった。その時あがった歓声は、会場一ぱいに広がり、しばらくは拍手の波がやまなかった。
 なせ、そのような拍手が起きたかというと、二百米ぐ

らいまでは、先頭から五、六番目にいたシカチャンが、そのあたりから次第に速力を増し、三百米では、トップにおどり出た。それから、集団との間隔を次第に拡げ、ゴールに入った時は、三米以上も引きはなしていた。
 わずか百米の間に、これだけ離すことが出来るのはシカチャンにしてみれば、かなり自信があつてのことだろうが、見ているものにはわからないので、疾風のようになげ抜けていく脚の運びを、観客は、まばたき一つせずに見守っていたのだ。一番先頭に出た時に起きた歓声は、ゴールインまで止まなかった。

この中田鹿夫は、福岡県嘉穂郡碓井町の部落に生れた好漢である。全部で三十戸ほどの部落であるが、八特殊部落として世間からは対等の付き合いをしてもらえなかったのだ、この部落を訪れる人はまずなかったといつてよい。

そこへ私が平民新聞を持って、売りに行ったのだから一苦労であった。最初のうちは、スパイでもあるように警戒され、道行く人によびかけても、答はおろか、顔をそむけられたものである。新聞など見ようともしない。振り向きもしないと言った方が本当であろう。

それでもこりずに、私は毎日、仕事が終わると、その部落へ出かけて行き、時には大声をはり上げて、平民新聞